

有舌尖頭器のサイズをめぐる諸問題

—再生加工の問題を中心として—

藤 山 龍 造

序章

第一章 有舌尖頭器研究におけるサイズの問題

第二章 有舌尖頭器分析の新たな視点

終章

日本列島に於いて、細石器文化が発展的消滅を遂げると、やがて土器や弓矢を生活手段の中に採り入れた新しい文化としての縄文文化が誕生する。その具体的な展開は未だ詳らかではないが、幾つかの主要な石器（道具）の消失と出現と変貌とその組合せの変化を追求することによって、徐々に発展過程が明らかにされていくと考えられる（小林達雄1961：49）

序章

縄文時代の初頭には、土器、弓矢などの道具が出現し、普及してゆくことが知られている。これらは先行する先土器時代には存在しなかった道具であり、その導入によって様々な変革が起こったことは十分に想起される。たとえば近藤義郎（1965）らが言及したように、煮沸具としての土器が導入されることによって、食物調理法に新たな選択肢が加わったと考えられるし、狩猟具としての弓矢の導入によって狩猟戦略、狩猟対象の幅が広がったことなどは十分に考えられる。こうした点において、先土器時代から縄文時代への移行期は大きな変革の時期であったと捉えることができる。縄文時代初頭におけるこれら新技術の導入に対しては、早くから関心が示されており、とくに土器からのアプローチは山内清男（1929）らによって昭和初年から開始されている。

冒頭に記した小林達雄（1961）の見解は、まさにこうした移行期の変革に対する関心から提示されたものである。ここで小林は石器研究という方法から、この変革へと接近する姿勢を示している。すなわち当該期に特徴的な石器の変遷を追うことによって、新技術導入の過程へと迫る可能性について記している。なかでも好適な研究対象の一つとして有舌尖頭器を挙げているが、この小林の視点、指針は妥当である。有舌尖頭器は石鏃⁽¹⁾が出現する直前からその初現期にかけて認められ、このことから弓矢の導入、普及という技術革新について考える上で不可欠な研究対象と考えられる。石器そのものの出現、普及、消滅という観点からはもちろん、それをを用いた狩猟活動の変化という点においても、有舌尖頭器の研究は重要な位置を占めている。そのような意義が見出されたからこそ、芹沢長介（1966）をはじめとして、幾人もの研究者によってその変遷への接近が試みられたと言えよう。

このように縄文時代初頭、すなわち縄文時代草創期について研究するうえで、有舌尖頭器の

比重は小さくない。しかし一方でこの時期の資料が量的に貧弱であること、良好な層位的出土例が限られていることなどもあり、活発に有舌尖頭器を研究する環境に恵まれていないのも事実である。こうした現状を踏まえるのであれば、資料の集成、蓄積にはじまる基礎的な研究があらためて要求される。そうしたかたちで地盤を固めてゆくことがまずもって必要であろう。

近年では各地で資料の集成が試みられており（たとえば上敷領1997、窪田2001、飛騨考古学会2001）、その蓄積も進みつつあるが、なかでも南関東地域は有舌尖頭器の資料が比較的豊富な地域である。とくに神奈川県およびその周辺地域においては著名な遺跡も多く⁽²⁾、縄文時代草創期の良好な資料が認められる。とくに花見山遺跡（横浜市ふるさと歴史財団1995）の有舌尖頭器は「花見山型」と呼ばれることもあるように、良好な資料として知られている。こうした遺跡の調査例は近年でも増加しつつあり、三ノ宮・下谷戸遺跡（かながわ考古学財団1999a）からは数百点におよぶ膨大な資料が出土している。これは量的な面ではもちろん、有舌尖頭器の製作技術、製作体制など、製作址遺跡の様相を窺い知ることができる点で、第一級の資料として位置づけられる。また湘南藤沢キャンパス内遺跡（慶應義塾1992、1993、1994）では広大な面積が調査されており、有舌尖頭器の平面分布を観察できる稀有な遺跡である。

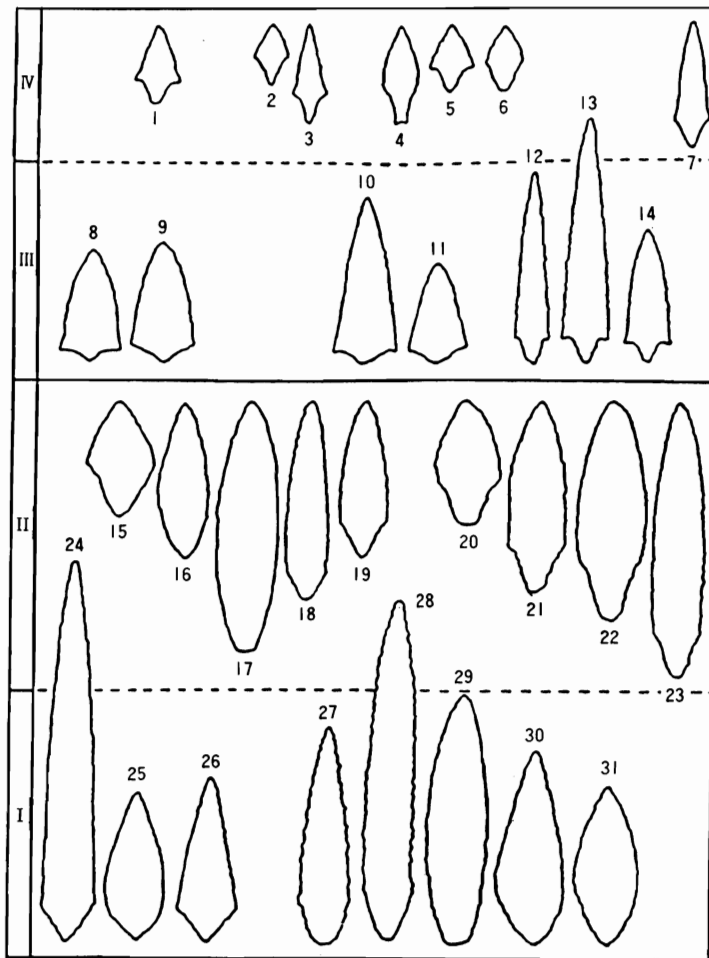
このように有舌尖頭器研究のうえで、神奈川県およびその周辺地域は全国的に見ても屈指の地域である。そうしたことから、まずはこの地域を中心として基礎的研究を進めることも可能と考えられる。本稿では有舌尖頭器の基礎的研究の一環として、とくにサイズに注目しつつ、その変遷の整理を試みる。

第一章 有舌尖頭器研究におけるサイズの問題

1. 先行研究の傾向

有舌尖頭器の編年は芹沢（1966）によってその試案が提出されて以来、複数の研究者によって論じられてきた（たとえば増田1981、加藤1978、鈴木1986、白石1988など）。これら先学の成果として、現在までにその大略的な変遷が明らかになりつつある。これらの成果については既に各所で触れられているため（たとえば鈴木1986、白石1988など）、ここでは詳述を控える。だがそれら先行研究に共通した方法的傾向が認められる点には注意を要する。すなわち有舌尖頭器の編年研究では、その平面的な形態がいくつかの種類化され、それぞれに共伴する土器や石器群の比較をとおして、時間軸上に序列化される。この一貫した手続きに基づいて、各類型は時間的な前後関係に置き換えられる。

こうして構築される編年観は、主にその舌部形態とサイズを変遷の指標としている。すなわちこれらの属性が経時的にどのように変化するかという点に注目する。たとえば芹沢（1966）は不明瞭な舌部を呈するものから明瞭なものへ、長大なものから短小なものへという変化を描いたが（第1図）、これはその典型である。このように主に二つの属性の変化に注目する傾向



第1図 芹沢(1966)による編年試案

1. 長野県曽根 2～3. 埼玉県橋立岩陰 4～6, 12～14. 新潟県小瀬ヶ沢 7. 山形県一ノ沢 8～9. 愛媛県上黒岩岩陰
10～11. 長野県柳又 15～19. 新潟県中林 20～23. 北海道 24～26. 福井県鳴鹿 27～31. 新潟県本ノ木

があるが、なかでもサイズの変化を重視する傾向がある。この理由の一つとして、石鏃の出現との関連がある⁽³⁾。たとえば芹沢（1966）らのように小型化現象の先に石鏃の出現を求める見解もあれば、より複雑な変化を想定し、単純に石鏃へと結び付けない見解もある。いずれにせよ先行研究においては、経時的なサイズの変化が重視されるが、この点において通時的なサイズのバラエティーに対する関心は大きかったと言える。

その一方で、一時期、一地域におけるサイズのバラエティーを重視することは少なかったようである。もちろん研究の当初から、こうした共時的なバラエティー⁽⁴⁾が認められることは知られていた。たとえば芹沢（1966）による編年試案の図（第1図）を見てもそれは明らかである。だがこうしたサイズのバラエティーは、有舌尖頭器の大略的な変遷を把握するために、さほど重視されることなく捨象されてしまう傾向があったことは否めない。たとえば芹沢編年で

は、これらのバラエティーは研究対象としては重要な位置を占めず、むしろ大型から小型への変遷を提示する上でさほど注目されなかったようである。もちろん増田一裕（1981）のように身部長比などを提示することはあったが、それらが研究の中心となることは稀であった。

こうした傾向が認められるなかで、筆者はこの共時的バラエティーを捉えることにも充分に意義があると考えている。有舌尖頭器は狩猟具、特に投槍の先端部としての機能を与えられることが多いが（鈴木1972）、こうした道具は様々な目的に応じてサイズを作りかえることが少なくない。とくに用途差などはその好例である⁽⁵⁾。それだけに狩猟具を研究する際には、共時的にどれほどのサイズ差を呈するかという点に対しても注意を払うことが要求される。

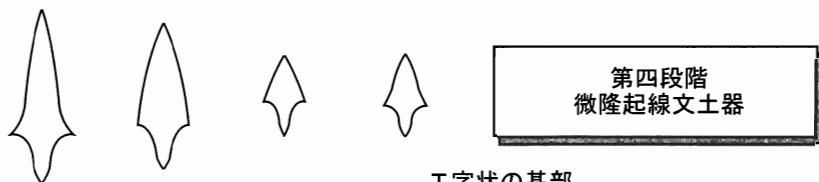
もちろん大略的な編年を把握するには、共時的なサイズ差をひとたび捨象したうえで考察する必要がある。その点において、先行研究は相応の成果をあげたと評価することができる。だがそうして変遷の大略が把握されつつある昨今においては、改めて共時的なバラエティーに対して目を向けることも要求される。ともすれば捨象されてしまいがちなこれらの情報に注意することによって、新たな有舌尖頭器の変遷の様相ひいては石鏃との関係についても射程に捉える可能性がある。この点において、小型化という変遷の傾向を捉えつつも、一時期に複数のタイプが認められるとした白石浩之（1988、1989）の視点は評価すべきである⁽⁶⁾。以下本稿では有舌尖頭器の基礎的研究を行ううえで、こうした共時的なサイズ差にも目を向けつつ、その変遷の整理、検討を試みる。

2. 有舌尖頭器の変遷概観

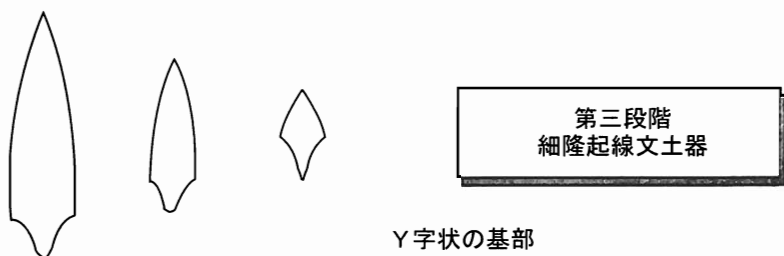
ところで共時的なバラエティーを把握するには、大略的な変遷が定まっていなくてはならない。ここでは分析対象地域⁽⁷⁾における有舌尖頭器の変遷を概観した後に、サイズの問題に触れることにする。当該地域におけるその変遷に関しては既に私見を記したことがあるため（藤山2001a）、ここでは詳細に論ずることを避け、変遷の概要についてのみ記す（第2図）。これは主に伴出する土器との関係から設定したものである。

第一段階

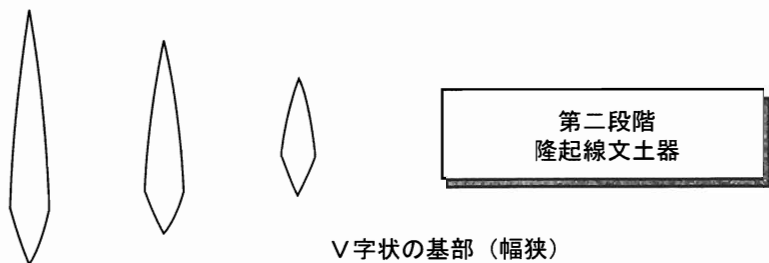
隆起線文系土器群以前の有舌尖頭器を発生期の資料として位置づける。土器を伴出しない資料、あるいは無文土器など、隆起線文系土器群に先行すると考えられる土器を伴出する資料をここにまとめた。この段階の資料は一般に舌部、返しの出が不明瞭であることに特徴を求められる。側縁部は比較的緩やかなラインを描いて舌部へと移行するため、V字状の基部を呈する。この段階では幅が広く、槍先形尖頭器との区別が難しいこともある。また土器を伴わない資料と伴う資料とでは時期差を示す可能性があるものの、セツルメントの問題⁽⁸⁾もあることから、ここでは同一の段階として区分しておく。勝坂遺跡（第45次調査）出土資料（相模原市市道磯部上出口改良事業地内遺跡調査団1993）、前田耕地遺跡出土資料（加藤他1983、前田耕地



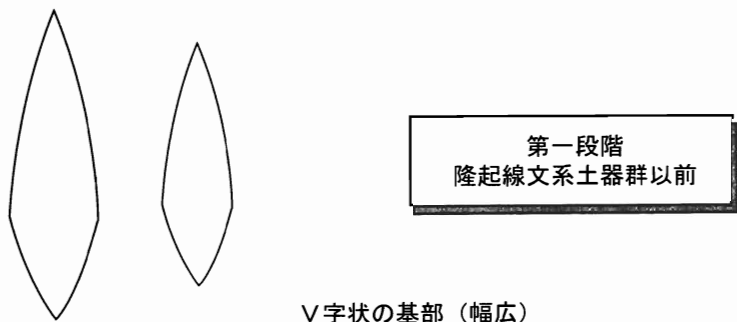
T字状の基部



Y字状の基部



V字状の基部（幅狭）



V字状の基部（幅広）

第2図 有舌尖頭器の変遷

遺跡調査会1977～1986)などがこの段階に該当すると考えられる。

第二段階

隆起線文系土器群のうち古相の所産とされる隆起線文土器（太隆起線文土器）を伴出する資料をここに位置づける。返しの作出は明瞭でなく、第一段階に引き続いてV字状の基部を呈するが、幅狭な資料が目立つようになる。この段階において槍先形尖頭器との区別は明瞭になる。この形状を呈する資料には、一部に土器を伴出しない例も存在し、第一段階との中間的様相を呈する。このことから若干古相の資料として位置づけることが可能かもしれないが、第一段階同様の理由から、ここでは同一の段階として一括する。南鍛冶山遺跡出土資料（藤沢市教育委員会1994）、黒川東遺跡出土資料（川崎市1979）、多摩ニュータウンNo. 426遺跡出土資料（東京都埋蔵文化財センター1981）などがこの段階に該当すると考えられる。

第三段階

隆起線文土器に後続する細隆起線文土器を伴出する資料を第三段階としてまとめた。舌部の作出が第二段階に比して明瞭になり、それと連動して返しの作出も明瞭となっている。返しから舌部端にかけて緩やかに内湾するものが多く、これによって基部はY字状を呈する。湘南藤沢キャンパス内遺跡Ⅰ区出土資料（慶応義塾1992）などがこの段階の資料として位置づけられる。

第四段階

隆起線文系土器群のうち、終末段階の所産と考えられる微隆起線文土器に伴出する資料をこの段階に位置づけた。返しの作出は第三段階よりもいっそう明瞭になり、舌部の作出も顕著になっている。返しが水平に近く張り出す資料も目立ち、細い舌部を作出するものも多いことから、基部はT字状に近くなる。側縁部の形状は内湾、外湾、それらを組み合わせたものなど多様である。三ノ宮・宮ノ前遺跡（伊勢原市教育委員会1990）、能見堂遺跡（横浜市ふるさと歴史財団1997）、宮之前南遺跡（かながわ考古学財団1998）、三ノ宮・下谷戸遺跡（かながわ考古学財団1999a）、宮之前遺跡（かながわ考古学財団1999b）などから出土した資料をこの段階の所産と見なすことができる。

以上に記した有舌尖頭器の変遷は、舌部がV字状からY字状を経てT字状へと変化する過程としてまとめることができる。これは舌部の明瞭化、あるいは返しの明瞭化と言い換えることも可能であり、この点では芹沢（1966）らが提示する編年観とほぼ矛盾しない。さらに言うのであれば、舌部に関しては一時期における形態の変異は顕著でなく、ある程度の規格性がある。これは舌部が着柄部であるゆえにランダムにつくことなく、一定の形状におさまる必要が

あったためと考えることもできる。

3. サイズの変遷について

このように舌部の形状に注目することによって、有舌尖頭器の変遷を定めることができる。こうしたなかで、先行研究でも注目されてきたサイズの変遷について検討していきたい。本稿ではサイズのバラエティーという視点から、その変遷を追跡してゆくが、はじめにそれがどの程度のサイズに収まるかという点について考える。第3図に最大長のヒストグラムを提示したが、これを見ればあらためて各段階にバラエティーが認められることが分かる。以下に段階ごとの傾向を示す。

第一段階

この段階の資料は出土点数が多くないことから詳細な検討は避けるが、最大長100mmを超える資料が多いと考えられる。この点においても、槍先形尖頭器との峻別は容易でない。

第二段階

最大長100mmを超える長大な資料が散見される一方で、40mm程度の短小な資料も認められる。この段階の資料も数量的に充分でないことから即断は避けるべきだが、多くの資料は50mmから70mm程度の範囲に収まる。

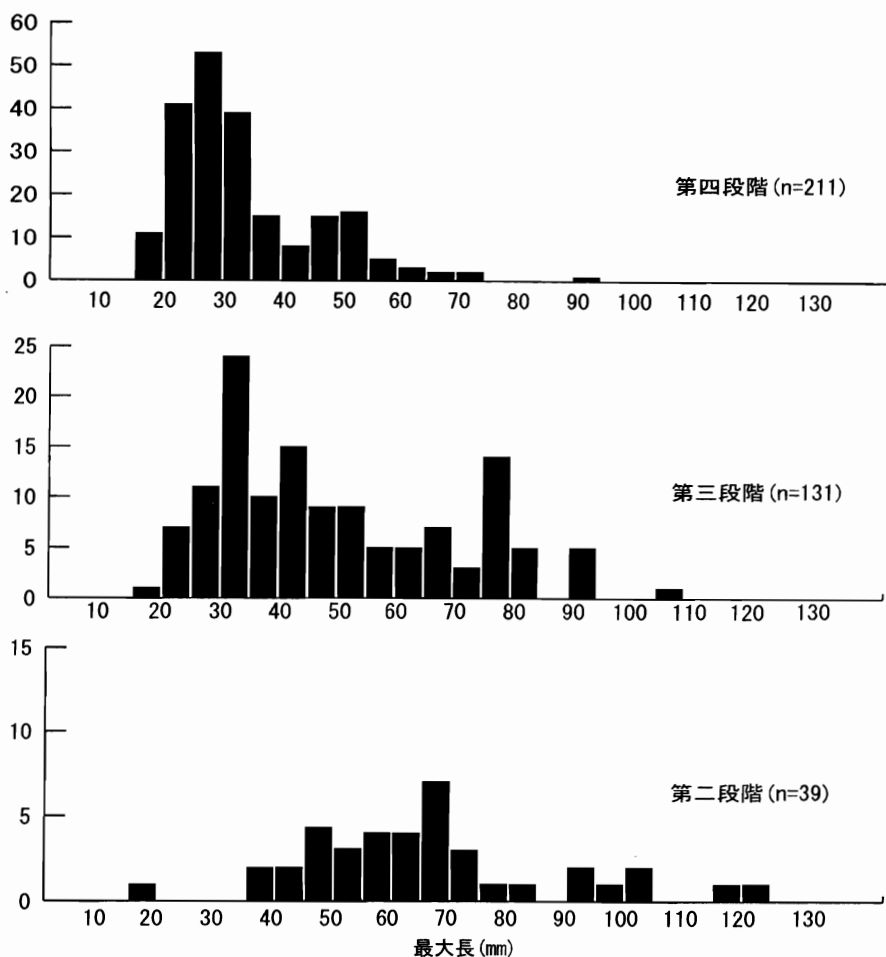
第三段階

この段階の資料は特徴的である。最大長は20mm前後から100mmを超えるものまで、かなりのバラエティーを示す。こうしたなかでも30mmから40mm程度の資料が多く認められ、一方で80mm程度の資料も一定量存在する傾向が認められる。すなわち少なくとも大きく二つの集中域を示す点に特徴がある。

第四段階

この段階の資料も第三段階に類似した傾向を示す。最大長20mm前後から60mmを超える資料まで幅がある一方で、最大長20mmから30mm程度の資料が多数を占めている。ただしこれは三ノ宮・下谷戸遺跡（かながわ考古学財団1999a）の膨大な資料がここに集中するためであり、実際には最大長50mm前後の資料も多い。このように前段階と同様、大きく二つのサイズに集中する傾向を指摘できる。

編年上重要な指標とされてきたサイズであるが、大略的な傾向を捉えた場合には、初期の長大な資料中心の段階から、短小な資料中心の段階へと変遷してゆく過程が看取される。このよ



親と大きく食い違うことは
バラツキがあり、これに注
が規格品ではないことから
つも一定のまとまりを示す
のサイズに収斂しない点で
上のサイズに偏る傾向が顕
ひの傾向を示しつつも、と
生が指摘される。

第二章 有舌尖頭器分析の新たなる視点

1. 有舌尖頭器の再生加工をめぐる問題

1-1) 石器の再生加工

ただしこの問題について考えるのであれば、再生加工という避けては通れない問題がある。すなわち単純に二つ以上のサイズに集中するからといって、それが製作時に生み出されたものと即断するわけにはいかない。言い換えるのであれば、このサイズ差は破損に伴う補修によって生じた可能性もあり、製作の当初においては認められなかった可能性もある。後述するように、近年では短小な有舌尖頭器がこうした現象によって説明されるケースもあるため、その可能性について触れておきたい。

再生加工に関する議論はFrison (1968) や Dibble (1987) による議論が著名である。Frisonは北アメリカ先史時代の石器資料に関して、Dibbleはヨーロッパ中期旧石器時代の資料、とくにスクレイパーに関して研究したことで知られている。これらの研究で指摘されたのは、石器の形態は製作から廃棄に至るまでの過程で、再生加工によって変形されるため、その結果廃棄され、現在我々が考古資料として目にする資料の形態は、必ずしも製作時のそれと同一ではないという点である。

これらの観点は国内にも導入され、阿部祥人 (1993)、長崎潤一 (1987)、新田浩三 (1995)、築瀬裕一 (1985) ら多くの研究者によって、様々な器種に関する分析が試みられている。しかしこれらの成果があげられる一方で、リダクション理論の濫用が見受けられるのも事実である。そもそもは形態分類に対する警鐘として提示されたリダクション理論であるが、近年では詳細な検討を欠いているにも関わらず、リダクションによってあらゆる形態のバリエーションを説明しようとする傾向も認められる。当然のことかもしれないが、再生加工によって石器の形態が変化しうる可能性と、それによって石器の形態が変化した事実は区別して考えなくてはならない。詳細に再生加工品の事例を検討しつつ、どの程度形態が変化しうるのか、どれほどの頻度でそうした現象が認められるのかという点について検討する必要がある。そしてそれ相応の根拠をもってリダクションの可能性とそれによる説明の有効性が提示されなくてはならない。

1-2) 有舌尖頭器のサイズと再生加工

これは有舌尖頭器に関しても同様である。一般にその主たる機能が投槍など狩猟具の先端部と推定されることは既に触れた。そうした用途から考えて、有舌尖頭器が頻繁に破損したことは容易に推測がつく。その際に、恐らくはその製作上の効率や石材の節約といった要因から、しばしば破損部分を補修し、完形の石器へと作り直すことによって、再び狩猟具としての機能を取り戻させたことは十分に想定される（たとえば阿部1993, Frison, Wilson, and Wilson 1976, Flenniken and Raymond 1986, Flenniken and Wilke 1989）。狩猟具という性質上、破

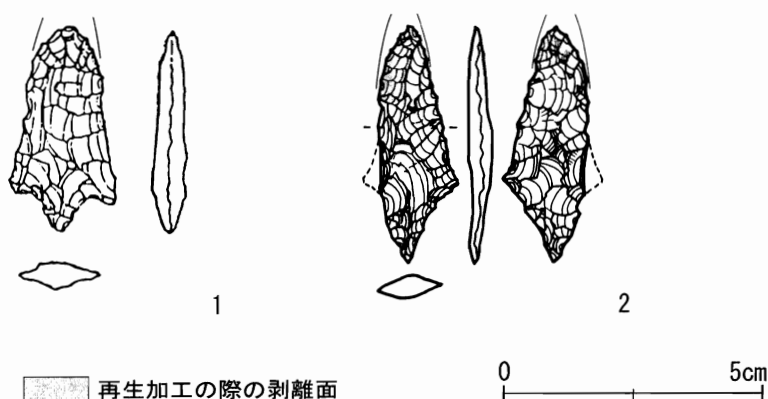
損の頻度も決して低くなかったであろうから、そうした石器が頻繁に修復されたとしても、決して不思議ではない。とくに先端部や舌部の破損が多いことは十分に想定されるし、実験によっても同様の傾向が得られている（たとえば御堂島1991, Barton and Bergman 1982, Bergman and Newcomer 1983, Flenniken and Raymond 1986, Odell and Cowan 1986, Towner and Warburton 1990）。そして何よりも出土例に先端部、舌部の破損が多いことから、そうした破損の修復を目的とした加工、すなわち再生加工によって有舌尖頭器の最大長が変化し、サイズの大小が生産された可能性は十分に考えられる。

実際に短小有舌尖頭器が再生加工の産物として説明されることは珍しくない。たとえば「花見山型」⁽⁹⁾などと称せられる短小有舌尖頭器が、再生加工のなれの果てとして語られるケースがある。また北海道の遠軽ポイントが再生加工の産物である可能性について指摘されるなど⁽¹⁰⁾（横山1986：7）、やはり再生加工による説明が少なくない。だがときとしてそうした説明は印象論に終始し、明確な根拠を有していないこともある。やはり再生加工によって小型化しうる可能性と、実際に小型化した現象との区別が必要である。ここでは再生加工が施されたと判断される有舌尖頭器について、いくつかの事例を検討し、それによる説明の可能性を探る。

1-3) 再生加工の事例

ところで尖頭器の再生加工は何を根拠にして判定すべきであろうか。Frison らは尖頭器に対する再生加工は以下の特徴によって見極められるとしている。すなわち再生加工を施された尖頭器は、①長軸方向の断面を観察した場合、その末端部において急激に厚みを減じ、②先端部に、製作時の規則的な剥離と異なる不規則的な剥離を有する上に、③側縁部の形状が急激に変化する、とする。更には④衝撃剥離が新たな剥離によって切られているものも、再生加工品としてみなしうるとしている（Frison and Stanford 1982：195-197）。またこれに加えて、先端部の剥離面とそれより下位の（すなわち基部よりの）剥離面との先後関係が明瞭な場合、すなわち前者が後者に比して時間的に後に形成されたと判断される場合、これも再生加工の傍証と見なすことが可能であろう。

こうした観点からいくつかの事例を観察してみよう（第4図）。1は子合頭遺跡から出土した有舌尖頭器である⁽¹¹⁾。明瞭な舌部、返しが作出されており、現存で最大長40mm、最大幅21mm、最大厚7mmを測る。両側縁部からの丁寧な押圧剥離によって、シンメトリカルに仕上げられている。個々の剥離は比較的深く、中軸線まで達するものもある。舌部は特に細かい剥離によって丁寧に作出されている。本資料の側縁部は直線的であるが、先端部で急激に屈曲している。屈曲部の剥離面は他の剥離面に後続することから、これらによって先端部の屈曲が生じたと考えられる。また先端部の長軸方向の断面を観察すると、急激に厚みが減少しており、不自然な形状を呈する。このことから先端部の破損に伴って、その部分に再生加工が施された資料と判断される。



第4図 再生加工を施された有舌尖頭器の例
1. 子合頭遺跡 2. 花見山遺跡

また2は花見山遺跡より出土した資料である。舌部の作出は明瞭だが、返しはそれほど明瞭でない。右側の返しを欠損しており、現存で最大長46mm、最大幅16mm、最大厚4mmを測る。表裏両面とも左右側縁部より押圧剥離が施されており、素材面は認められない。本資料の先端部は左右非対称であるが、これは左側縁部に対して重点的に細かな剥離が施されることによって先端部が作出されたためである。この剥離は下位の剥離に比して新しく施され、これによって先端部が屈曲していることから、先端部の破損に伴う再生加工品と推察される。

1-4) 再生加工説の可能性

ここに観察されたように、有舌尖頭器に再生加工が施された例はいくつか認められる。このことから考えて、再生加工の結果として有舌尖頭器が小型化することは、実際に起こった現象といえる。しかしここで注意しなくてはならないのは、こうした事例は必ずしも多くないという点である。前述した事例のように、再生加工の痕跡が明瞭に観察された資料は極めて限られている。もちろんこれは痕跡が明瞭な資料に関しての話であり、それ以外にも再生加工を施された資料が存在することは十分に考えられるし、それが自然であろう。しかしここで重要なのは、そのように認定し得ない資料が存在することを考慮に入れたとしても、再生加工の事例が少ないと考えられることである。破損資料を観察すると、十分に再生加工が可能であるにもかかわらず、それが施されていない資料が多い。このことから考えて、少なくとも折れれば補修するほど、再生加工が高頻度であったと判断することはできない。

有舌尖頭器に対して再生加工を施すには、本来身部のなかでも基部寄りであった部分を先端部へと作りかえなくてはならない。しかしながら、ある程度の厚みを持った基部寄りの部分を

先端部へとつくりかえるには、その厚みを取り除いて、先端部に適した薄さにする必要がある。また同時にそれを尖頭状に作り上げなくてはならないことから、極めて煩雑な作業が要求される（西村1989）。この点において有舌尖頭器はスクレイパーなどの器種とは異なっており、再生加工を加える作業は容易ではない。これは僅かな破損であればさほど問題とならないかもしれない。しかし長大な資料を短小な資料として再生するのであれば、この工程を避けることはできない。

したがって効率という問題について考えるのであれば、再生加工によって大きく形態を変更することが、それ程有効だとは考えられない。ましてや長大な資料が短小なそれへと変わるまで、徹底的に再生加工を繰り返すことが日常的であったと積極的に判断することはできない。第4図に示した事例を観察する限りでは、再生加工によって10mm前後サイズが減少したと判断されるが、これは例外的な数値ではないだろう。すなわち再生加工を原因とする小型化現象は確かに認められるが、それによって数十mmもサイズが変化すると想定するのは現実的ではあるまい。換言するならば、有舌尖頭器の変遷過程で認められる大小の分化現象が、こうした二次的要因に帰されると判断することはできない。

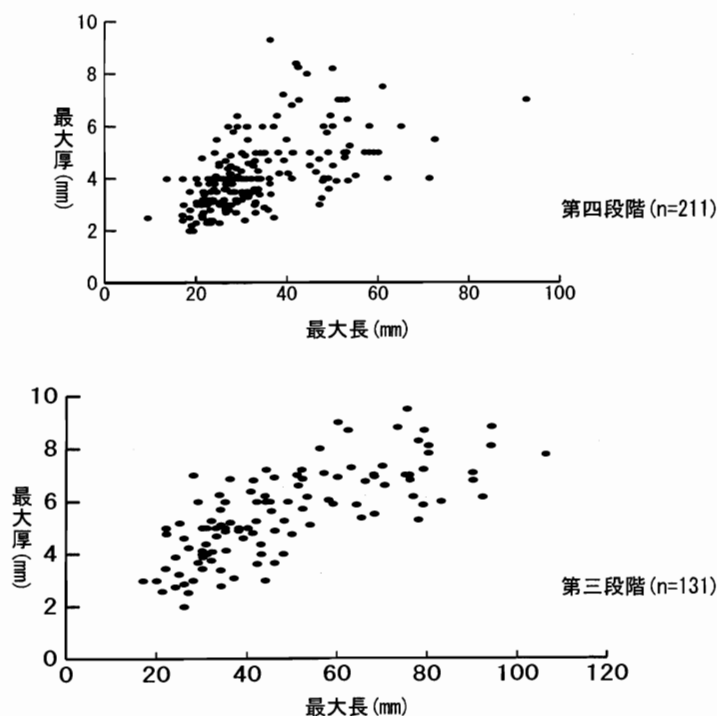
2. 有舌尖頭器のつくり分け

2-1) 最大厚の問題

以上のように再生加工という要因のみにてサイズのバラエティーを説明することは、いささか妥当性に欠けている。共時的なサイズのバラエティーへと目を向けるのであれば、やはり大小の資料が分化している可能性を考慮に入れなくてはならない。このように考えた場合、有舌尖頭器の最大厚について検討することが重要な意味を帯びてくる。再生加工が施され、石器の形態が変形するとき、一般に厚さはもっとも変化しにくい属性の一つと考えられる⁽¹²⁾。したがってこの属性に注目することによって、再生加工の有無について検討することも可能と考えられる。ここではこの属性に注目し、再生加工による説明の妥当性を検討する。なお以下では便宜的に、ヒストグラム（第3図）上に認められる大小をそれぞれ「大型品」、「小型品」と呼ぶことにする⁽¹³⁾。

資料数が多い第三段階、第四段階について、その最大長－最大厚比を散布図にて示した（第5図）。「大型品」に対して再生加工が加えられ、その結果「小型品」へと変化したのであれば、両者の最大厚は近似することが予測される。しかし現実には必ずしもその通りではない。すなわち「大型品」と「小型品」とでは最大厚に少なからず差が認められることが分かる。すなわち第三段階においては、後者の多くは最大厚3mmから6mm程度を測るのに対して、前者は最大厚6mmから9mm程度が主体となっている。また第四段階においては、「小型品」が最大厚2mmから5mm程度を測る一方で、「大型品」は多くが4mmから7mmの範囲に収まることがわかる。このように両段階において、「大型品」と「小型品」とでは最大厚にズレが認められる。

こうした点を鑑みるのであれば、「小型品」を「大型品」のなれの果てとして位置づけるこ



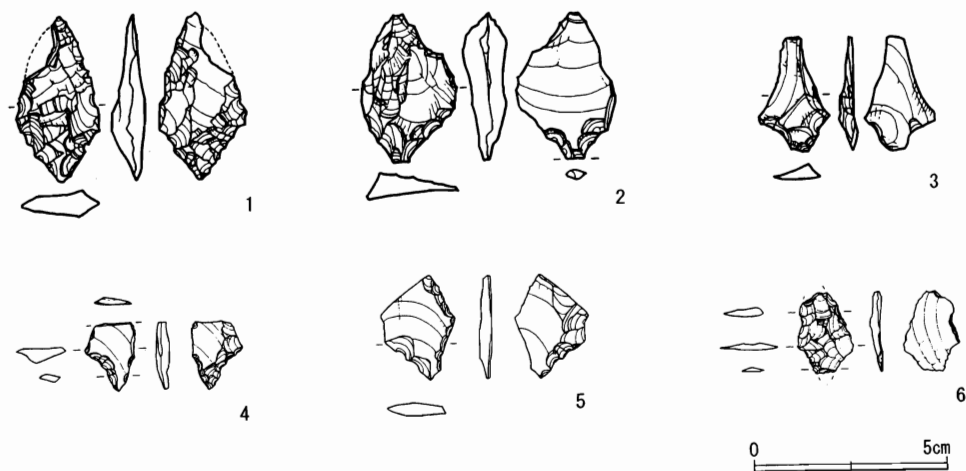
第5図 有舌尖頭器の最大長—最大厚比

とは困難をとまなう。もちろん最大厚に関して、両者が近似する場合もある。したがって、再生加工の結果小型化した資料が存在する可能性は認めなくてはならないだろうし、実際に存在する。しかしここで重要なのは、それでも製作の当初から「大型品」と「小型品」とが存在したと考えられる点である。

2-2) 素材選択の問題

この問題を考えるうえで、素材の選択に注目することも重要である。たしかに有舌尖頭器は両面加工石器であるため、素材面を残さないものが多い。それゆえ素材の選択について検討することは必ずしも容易でない。しかし「小型品」に関しては素材面を残す資料も少なくないことから、選択された素材について触れることもあながち不可能ではない。

第6図に有舌尖頭器の未成品を示した。ここから「小型品」の素材について若干触れてみたい。紙幅の都合上詳述は控えるが、これら未成品に共通しているのは、そのいずれもが完成品を幾分上回る大きさ、厚さの剥片であるという点である。そしてこれに細かな押圧剥離を施し



第6図 「小型品」の未成品
1～3. 花見山遺跡 4～6. 三ノ宮・下谷戸遺跡

ていくことによって、先端部や舌部などの部位が作出されてゆく。すなわちここでは大型の素材を大幅に作りかえるのではなく、小型の素材に対して少々の調整を加えることによって完成品へと仕上げてゆく傾向が認められる。周縁調整の資料、主剥離面を残す資料が多いのは、こうした工程に由来すると考えられる。

一方の「大型品」の素材に関しては不明なところが多い。だが「大型品」の素材がどのようなものであれ、ここで重要なのは「小型品」の素材が小さく、ともすれば完成した「大型品」をも下回るという点である。すなわち「小型品」は素材選択の時点で小さいのであって、「大型品」の再生加工の産物とみなすことは困難である。「大型品」と「小型品」とでは、製作の工程そのものが異なっていた可能性も想定される。この点については稿を改めて論ずるが、本稿で重要なのは、やはり両者が製作の段階から区別されているという点である。

2-3) 小結

上述した最大厚、あるいは素材の選択について総合的に考慮するならば、製作時から有舌尖頭器が「大型品」と「小型品」とに区別されていたと判断される。少なくとも第三段階、第四段階に関してはそのように言えよう。ただし第二段階に関しては資料不足であるため、大小の分化について決断を下しかねる。短小な資料が限られており、また最大厚などの属性に関しても明瞭な差異が認められないことから、再生加工の可能性を積極的に否定できない。この段階には細身かつ長大な資料が多く、破損しやすい形態を呈するだけに、そうした可能性も想定しなくてはならない。むしろ第三段階、第四段階において、大小の区別が明瞭になる点にこそ意義を見出すことができるのかもしれない。

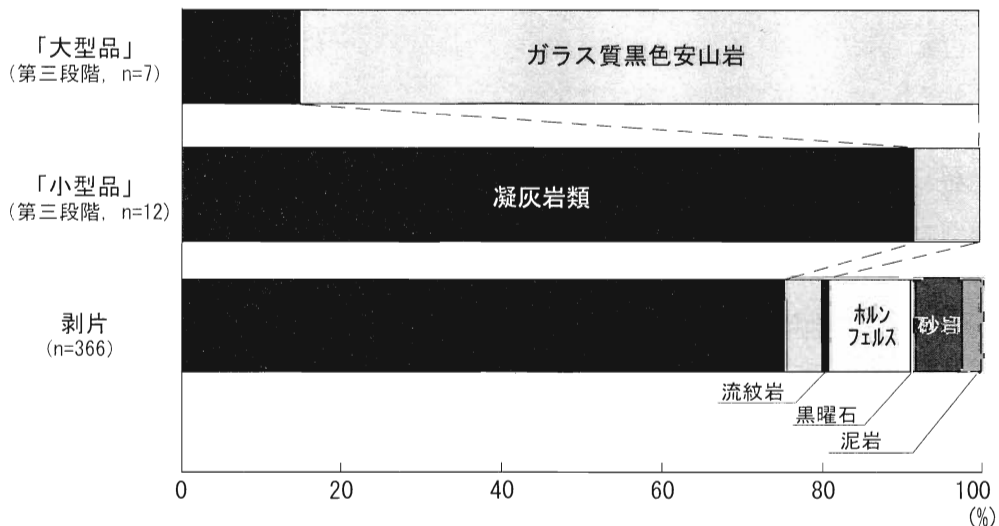
3. 製作地の問題

3-1) 湘南藤沢キャンパス内遺跡の事例分析

ところでこのようにサイズが分化しているなかで、ときとして「大型品」と「小型品」とが使用石材からも区別される点には注意を要する。ここではそうした原材料に関する問題を取り上げるが、各遺跡を超えて一律に石材の問題を論ずるよりも、豊富な資料を出土した遺跡単位の事例分析からはじめたい。

本稿では広大な面積が調査され、多くの有舌尖頭器を出土した湘南藤沢キャンパス内遺跡（慶應義塾1992、1993、1994）の事例を取り上げることからはじめる。本遺跡は、相模川の東岸、高座丘陵のほぼ中央部に位置し、縄文時代草創期の良好な資料が検出されている。本研究では、同遺跡から出土した有舌尖頭器のうち、第三段階の資料19点、第四段階の資料14点を対象とし、「大型品」と「小型品」との石材差についてそれぞれ検討した。

第三段階の検討結果を第7図に示してあるが、ここから一目瞭然のように、「大型品」と「小型品」とではその使用石材が少なからず異なっている。すなわち「大型品」には、本遺跡周辺では箱根火山周辺でしか採取できないガラス質黒色安山岩（たとえば上本・境1998、柴田1994、1995、1996、柴田・上本・山本1991、山本1993、1996、山本・柴田・高松1997）が多用されているのに対し、「小型品」は遺跡周辺で採取可能な凝灰岩類（柴田1994、1995、1996、中村1995）が多用されている。これは言い換えるのであれば、「大型品」が主に非在地系の石材を選択的に利用して製作されるのに対して、「小型品」が在地系の石材を多用して製作されるという、明瞭な差異が認められる。また第四段階に関しては「大型品」が限られているため断言するこ



第7図 湘南藤沢キャンパス内遺跡における有舌尖頭器および剥片の石材組成

とができないが、類似した傾向を読み取ることが可能である。

さらに本遺跡から出土した剥片の石材組成について検討した結果⁽¹⁴⁾（第7図）、殆どが在地系石材の凝灰岩類であり、非在地系石材であるガラス質黒色安山岩は僅かであった。しかも後者のほとんどは、尖頭器などを調整する最終段階で生じた剥片であるという結果を得た⁽¹⁵⁾。これに加えて、有舌尖頭器の未成品及び、明らかに製作時に破損したと考えられる有舌尖頭器についても検討したところ、そのすべてが凝灰岩製の「小型品」であった。

そうしたことから、少なくとも本遺跡に関しては次のように結論することができる。すなわち「大型品」が遺跡外で製作され、本遺跡に搬入された一方で、「小型品」に関しては、遺跡内で製作された可能性が指摘できる。すなわち「大型品」と「小型品」とでは、その製作地が異なっていた可能性がある⁽¹⁶⁾。この点に関して、前田耕地遺跡（加藤他1983、前田耕地遺跡調査会1977～1986）や三ノ宮・下谷戸遺跡（かながわ考古学財団1999a）、下茂内遺跡（長野県埋蔵文化財センター1992）など、石材の原産地周辺に位置し、狩猟具を大量に製作、搬出していた遺跡が認められることは極めて示唆的である。

3-2) 製作場所の問題

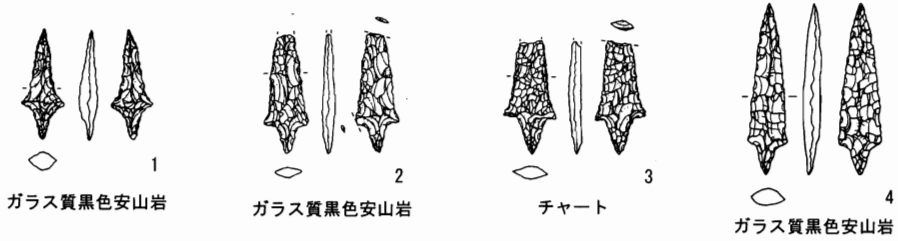
こうした事例を踏まえて他遺跡の例について考えるならば、類似した傾向が看取されることに気がつく。とくに相模野台地以西の地域に顕著な傾向であるが、この地域ではやはり「大型品」にガラス質黒色安山岩やチャートなど、非在地系の石材が多用されている（第8図）。これら非在地系石材を用いた「大型品」が多く認められる一方で、その未製品や製作時の破損品は限られている。またその素材となりうる礫、剥片も限られており、製作の痕跡を窺い知ることが困難である。前述した事例分析の結果を考え合わせるのであれば、これらの「大型品」が搬入品であった可能性も想定しなくてはならない。

その一方で「小型品」にはガラス質黒色安山岩も用いられるが、その他在地の石材も多用される傾向を見て取れる。これらには湘南藤沢キャンパス内遺跡（慶應義塾1992、1993、1994）のように、遺跡内で製作されたと判断される資料も少なくない。しかし三ノ宮・下谷戸遺跡（かながわ考古学財団1999a）のようにガラス質黒色安山岩を用いて、「小型品」ばかりを大量に製作、搬出していた遺跡もあることから、必ずしも単純化して考えることはできないようである。とくに第四段階以降、ガラス質黒色安山岩製の「小型品」が増加する点には注意する必要があるだろう⁽¹⁷⁾。こうしてみた場合、有舌尖頭器の製作場所は極めて複雑な様相を呈していると言うこともできる。製作址遺跡、消費地遺跡の調査例が増えなくてはその詳細な検討は困難であろうが、今後そうした製作地の問題についても考えてゆく必要がある。

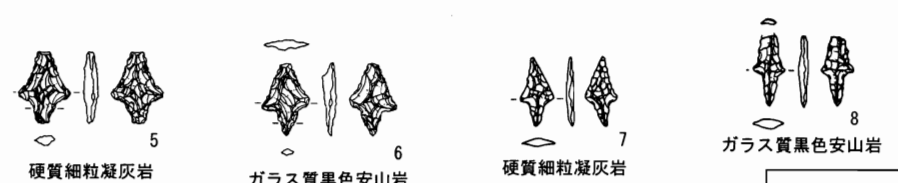
終章

マクロな視点から捉えるのであれば、有舌尖頭器の変遷は大型から小型へという流れを描く

「大型品」

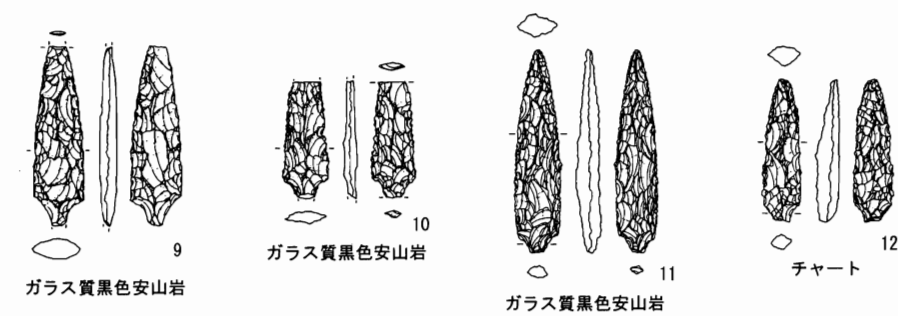


「小型品」

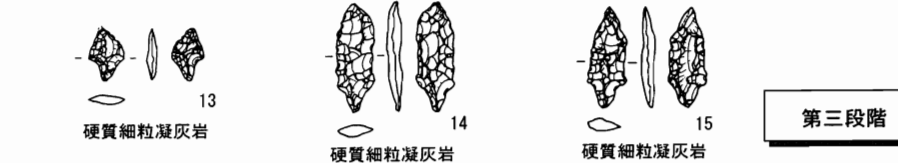


第四段階

「大型品」



「小型品」



第三段階



第8図 有舌尖頭器の「大型品」と「小型品」

1～3, 9～10. 吉岡遺跡群A区 4, 7, 13～15. 湘南藤沢キャンパス内遺跡Ⅰ区
5～6, 11～12. 臼久保遺跡 8. 湘南藤沢キャンパス内遺跡Ⅱ区

ことができる。これはその変遷の一側面として重要である。一方で本稿の主目的は、ややミクロな視点も使い分けつつ、その変遷を捉えることであった。すなわち各段階に認められるサイズのバラエティーに注目することによって、より複雑な有舌尖頭器の変遷過程を捉えられる。これによって少なくともその後半段階において、有舌尖頭器は「大型品」と「小型品」とに分化している様相を読みとることが可能である。

この分化は再生加工という単一の要因に帰されることはない。むしろ製作時から両者が区別されていた姿を読みとることが可能である。もちろん再生加工という現象そのものは否定されないが、それでもこうした様相が看取される点が重要である。これら大小の資料はときとして製作場所を異にしていた可能性もあり、そうした複雑な体制のなかで有舌尖頭器が製作されていたと考えることができる。

もちろんこれは有舌尖頭器のみにて完結する問題ではない。この第三段階、第四段階は石鏃が狩猟具の組成へと加わり、安定してゆく時期である。当然のことながら、有舌尖頭器の小型化現象の延長線上に石鏃の出現を想定することはできない。むしろここで注目すべきは、隆起線文系土器群の後半段階において、大小の有舌尖頭器、石鏃に槍先形尖頭器が加わった、極めて複雑な狩猟具組成が認められる点である。この複雑な組成こそが有舌尖頭器の後半から終末段階の様相である。そしてこうした組成から、石鏃主体の組成へと移行してゆく。これこそが縄文時代初頭における石鏃出現、普及の過程である。

この点において石鏃導入と有舌尖頭器のサイズ分化との関係は注目に値する。ここでは結論を留保せざるを得ないが、このサイズ差が機能差を反映したことなどは、十分に想定される。したがってこのサイズ差を的確に位置づけることによって、石鏃を主体とした狩猟具組成へと移行してゆくその様相について接近する可能性もある。サイズ差の性格について考えることは容易でないだろうが、居住地に残された資料と、そこから持ち出された資料のサイズが異なっている点（藤山2001b）は、重要なヒントかもしれない。いずれにせよ狩猟具のサイズ分化という観点から、先土器時代から縄文時代への移行の様相について、その一端を捉えることも可能となってくるだろう。

註

- (1) 縄文時代初頭における「石鏃の出現」とは、慣例的に無茎石鏃の出現を指すことが多い。これは縄文時代前半における石鏃の大半に茎の作出が認められないことによるが、実際には短小有舌尖頭器が鏃的に使用された可能性もある。すなわちここで言う「石鏃の出現」とは、器種としての石鏃の出現と同義であり、必ずしも弓矢の出現と平行でないことに注意しなくてはならない。本稿では石鏃という用語を用いるとき、慣例にしたがって無茎石鏃を指すことを断っておく。
- (2) 比較的早くから知られている遺跡として、上野遺跡第1地点（大和市教育委員会1986）、なすな原遺跡（なすな原遺跡調査会1996）、花見山遺跡（横浜市ふるさと歴史財団1995）、相模野第149遺跡（大和市教育委員会1989）、寺尾遺跡（神奈川県立埋蔵文化財センター1980）などがある。これらの大半は隆起線文系土器群、あるいはその前後の段階に比定されるが、南関東ではこの段階の遺跡が多いことで知られる。一方で後続する多縄文系土器群の段階に比定される遺跡は限られている。このように縄文時代草創期でも、その前葉の遺跡が多い点に本地域の特色を求めることができる。

- (3) もちろんこれは石鏃出現への関心にとどまらない。たとえば重要な問題として、本ノ木論争との関連がある。長大な尖頭器と短縄文を施文した土器との共伴の可能性をめぐるのは、芹沢と山内との間で議論が交わされたが（芹沢・中山1957、山内1960、山内・佐藤1962）、ここでは長大な尖頭器の時間的位置が問題となる。言い換えるのであればそれが縄文時代初頭の早い段階の所産であるか、それとも遅くまで存在するかどうかの問題となるのである。この点において、長大な有舌尖頭器の時間的位置に関心が寄せられる。
- (4) ここで共時的というとき、必ずしも厳密な意味での共時性を指すわけではない。すなわちここでは同時性を指すのではなく、近接した時間を含んだ概念としてこの用語を用いている。
- (5) たとえば佐藤宏之（2000:126）はロシア沿海州の狩猟漁労採集民であるウデヘが、クマヤアカシカ用の「大型の槍」と、イノシシ用の「小型の槍」とを区別して利用する事例を報告している。
- (6) 白石（1988）は舌部の形状などに基づいて、有舌尖頭器を6つの類型に大別している。そしてそのうちいくつかが組み合わさって変遷してゆく過程を提示した。白石の指摘は熟考に値するが、その事実認定には慎重を要する。すなわち土器との確実な共伴関係が捉えられない事例も多いことから（藤山2001a: 42）、今後そうした点も含めて検討してゆくことが要求される。
- (7) 本稿で分析対象とするのは神奈川県およびその周辺地域である。具体的には多摩川流域の武蔵野台地から多摩丘陵、相模野台地を経て相模川西岸の秦野盆地、大磯丘陵へと続く地域を主体としている。なお本稿で提示する変遷観は東日本一帯で適用可能と考えている。
- (8) 狩猟場、一時的なキャンプサイト、石器製作址など、恒常的な居住の場以外では、必ずしも土器を出土するとは限らない。このことから、土器を伴出しないことイコール時期差と即断することは慎重を要する。遺跡の機能について勘案したうえで時間的問題が論ぜられるべきである。
- (9) とすれば「花見山型」という概念は曖昧に定義されたまま用いられ、研究者間で一貫していないことがある。そもそも坂本彰（1995）は、良質な石材の入手が困難な花見山遺跡において、原石が徹底的に消費される姿を「花見山型」として定義している。すなわちここで指摘されたのは、石器の「製作から器種構成に及ぶ全体系」（坂本1995: 119）であった。
- 一方で白石浩之（1988）のように、返しや舌部の作出が明瞭な有舌尖頭器に対してその用語を使用する場合もある。これは石器群ではなく、有舌尖頭器という単一の器種に限定した定義である。さらに有舌尖頭器に限定した場合でも、短小な資料のみを示す場合もある。またよりいっそう限定して、花見山遺跡に認められる十字形の資料（報告書図版66、No. 66）のみを指す場合もあり、その定義が相当に入り乱れていることが分かる。
- このことから、現時点で「花見山型」なる用語を用いるのは混乱を招く恐れがある。したがって用語の使用を控えるか、もしくは明確な定義のもとに使用することが要求される。
- (10) 横山（1986: 7）は遠軽ポイントが量的に限られている点、形状のいびつさ、二次加工の粗さなどから、それが長大な立川ポイントの再生加工品である可能性について触れている。再生加工の可能性について論じる際には、こうした根拠が提示されることが望ましい。
- (11) 本資料に関しては、筆者は実見しておらず、実測図上の判断であることを断っておく。また計測値に関しても同様である。
- (12) たしかに有舌尖頭器は両面加工石器であるがゆえに、再生加工の際に厚みを減ずることもあっただろう。しかしそれは破損部の厚さが変化することであって、最大厚そのものは変化しにくかったと考えられる。
- (13) ヒストグラム上でのサイズの分布から考えて、「大型品」と「小型品」との境界に関しては、便宜的に50mm（第三段階）、40mm（第四段階）と設定しておく。
- (14) 「情報基盤センター」（慶應義塾1994）より出土した剥片に関しては、すべてを実見していないため、ここではデータに加えていない。本調査区出土資料の大半は、伴出した土器との関係から、第二段階の所産と判断されるため、データとしては問題ないと考えられる。
- (15) 一方の凝灰岩製の剥片には礫打面の資料も多いことから、原石もしくはそれに近い状態でそれが持ち込まれたことが推察される。
- (16) この傾向は槍先形尖頭器にも当てはまる。短小な資料には凝灰岩類が多用されるのに対して、長大なそれにはガラス質黒色安山岩やチャートなどの非在地系石材が利用されている。このことから、後者が遺跡外で製作された搬入品であった可能性を指摘することができる。
- (17) 想像をたくましくすることが許されるならば、この段階において三ノ宮・下谷戸遺跡のように「小型品」ばかりを集中的に製作、搬出する体制が整った可能性もある。「小型品」の位置づけとともに、今

後検討してゆかなくてはならない問題である。

引用・参考文献

[論文(邦文)]

- 阿部祥人 1993 「石器の欠損と再生加工」 『史学』 62-3
- 上本新二・境雅仁 1998 「箱根火山のガラス質黒色安山岩」 『神奈川考古』 34
- 加藤晋平他 1983 「秋川市前田耕地遺跡 —縄文時代草創期の住居址と石器製作址—」 『日本考古学協会第49回総会 研究発表要旨』
- 加藤 稔 1978 「有舌尖頭器に関する覚書」 『弓張平遺跡 第一次二次発掘調査』
- 上敷領久 1997 「南関東における有舌尖頭器の展開」 『東京考古』 15
- 窪田恵一 2001 「武田西塙遺跡の旧石器時代終末期～縄文時代草創期石器群について —茨城県における当該時期の一樣相—」 『武田西塙遺跡 旧石器・縄文・弥生時代編』
- 小林達雄 1961 「有舌尖頭器」 『歴史教育』 9-3
- 近藤義郎 1965 「後氷期における新しい道具」 『世界歴史 第一巻 先史の世界』 人文書院
- 坂本 彰 1995 「第3章 第3節 石器」 『花見山遺跡』
- 佐藤宏之 2000 『北方狩猟民の民族考古学』 北海道出版企画センター
- 柴田 徹 1994 「使用石材から見た旧石器時代の南関東における地域性について」 『松戸市立博物館紀要』 1
- 柴田 徹 1995 「南関東における石器石材」 『石器石材』
- 柴田 徹 1996 「かながわにおける縄文草創期の使用石材」 『かながわの縄文文化の起源を探る』
- 柴田徹・上本進二・山本薫 1991 「宮ヶ瀬遺跡群および神奈川県内出土の緻密黒色安山岩製石器の石材産地」 『宮ヶ瀬遺跡群Ⅱ』
- 白石浩之 1988 「縄文文化の起源をめぐる問題 —有舌尖頭器からの一提言—」 『神奈川考古』 24
- 白石浩之 1989 『旧石器時代の石槍』 東京大学出版会
- 鈴木道之助 1972 「縄文時代草創期初頭の狩猟活動 —有舌尖頭器の終焉と石鏃の出現をめぐる—」 『考古学ジャーナル』 76
- 鈴木道之助 1986 「新東京国際空港No. 12遺跡の有舌尖頭器をめぐる」 『千葉県文化財センター研究紀要』 10
- 芹沢長介 1966 「新潟県中林遺跡に於ける有舌尖頭器の研究」 『日本文化研究所研究報告』 2
- 芹沢長介・中山淳子 1957 「新潟県津南町本ノ木遺跡調査予報」 『越佐研究』 12
- 長崎潤一 1987 「石斧の形態変化について —接合資料を中心として—」 『早稲田大学大学院文学研究科紀要 別冊 第14集 哲学・史学編』
- 中村喜代重 1995 「旧石器時代の相模野台地と凝灰岩原産地」 『旧石器考古学』 51
- 西村勝彦 1989 「西区Ⅲ層出土槍先形尖頭器の形態分類と修正・再生加工の可能性について」 『野川中洲北遺跡』
- 新田浩三 1995 「下総型石刃再生技法の提唱」 『千葉県文化財センター研究紀要』 16
- 飛騨考古学会 2001 「有舌尖頭器集成」 『飛騨と考古学Ⅱ 旧石器特集号』
- 藤山龍造 2001a 「神奈川県下における有舌尖頭器の変遷」 『利根川』 22
- 藤山龍造 2001b 「狩猟具出土の場とその評価 —縄文時代草創期における「単独出土」資料の位置づけ—」 『民族考古』 5
- 増田一裕 1981 「有舌尖頭器の再検討 —本州・四国の出土例を中心として—」 『旧石器考古学』 22
- 御堂島正 1991 「石鏃と有舌尖頭器の衝撃剥離」 『古代』 92
- 築瀬裕一 1985 「乱馬堂遺跡におけるエンド・スクレイパーの属性分析」 『考古学研究』 31-4
- 山内清男 1929 「関東北に於ける繊維土器」 『史前学雑誌』 1-2
- 山内清男 1960 「縄文土器文化のはじまる頃」 『上代文化』 30
- 山内清男・佐藤達雄 1962 「縄文土器の古さ」 『科学読売』 12- 13
- 山本 薫 1993 「緻密黒色安山岩製石器の石材産地推定方法について」 『筑波大学先史学・考古学研究』 4
- 山本 薫 1996 「中部・東海および関東地方の石器に利用される緻密黒色安山岩(ガラス質黒色安山岩)の特徴と石材産地」 『愛鷹・箱根山麓の旧石器時代編年』
- 山本薫・柴田徹・高松武次郎 1997 「ガラス質黒色安山岩製石器の石材産地推定方法に関する研究—蛍光X線分析法とプレパラート法による石材産地推定結果の比較と評価—」 『縄文時代』 8

横山英介 1986 「北海道の有舌尖頭器」 『考古学ジャーナル』 258

[論文(欧文)]

- Barton, R. N. E. and C. A., Bergman 1982 "Hunters at Hengistbury: Some Evidence from Experimental Archaeology" *World Archaeology* 14-2
- Bergman, C. A. and M. H., Newcomer 1983 "Frint Arrowhead Breakage: Examples from Ksar Akil, Lebanon" *Journal of Field Archaeology* 10-2
- Dibble, H. L. 1987 "The Interpretation of Middle Paleolithic Scraper Morphology" *American Antiquity* 52-1
- Flenniken, J. J. and A. W., Raymond 1986 "Morphological Projectile Point Typology: Replication Experimentation and Technological Analysis" *American Antiquity* 51-3
- Flenniken, J. J. and P. J., Wilke 1989 "Typology, Technology, and Chronology of Great Basin Dart Points" *American Antiquity* 91-1
- Frison, G. C. 1968 "A Functional Analysis of Certain Chipped Stone Tools" *American Antiquity* 33-2
- Frison, G. C. and D. J., Stanford 1982 *Agate Basin Site: A Record of the Paleoindian Occupation of the Northwestern High Plains* Academic Press, New York
- Frison, G. C. M., Wilson and D. J., Wilson 1976 "Fossil Bison and Artifacts from an Early Altithermal Period Arroyo Trap in Wyoming" *American Antiquity* 41-1
- Odell, G. H. and F., Cowan 1986 "Experiments with Spears and Arrows on Animal Targets" *Journal of Field Archaeology* 13-2
- Towner, R. H. and M., Warburton 1990 "Projectile Point Rejuvenation: A Technological Analysis" *Journal of Field Archaeology* 17-3

[発掘調査報告書]*

- 伊勢原市教育委員会 1990 「三ノ宮・宮ノ前遺跡」 『文化財ノート』 1
- 神奈川県立埋蔵文化財センター 1980 『寺尾遺跡』
- かながわ考古学財団 1998 『長津田遺跡群IV 宮之前南遺跡』
- かながわ考古学財団 1999a 『三ノ宮・下谷戸遺跡I』
- かながわ考古学財団 1999b 『長津田遺跡群V 宮之前遺跡』
- 川崎市 1979 『黒川東遺跡』
- 慶應義塾 1992 『湘南藤沢キャンパス内遺跡 第2巻 岩宿時代・縄文時代I部』
- 慶應義塾 1993 『湘南藤沢キャンパス内遺跡 第1巻 総論』
- 慶應義塾 1994 『湘南藤沢キャンパス内遺跡 情報基盤センター(仮称)』
- 相模原市市道磯部上出口改良事業地内遺跡調査団 1993 『勝坂遺跡第45次調査』
- 東京都埋蔵文化財センター 1981 『多摩ニュータウン遺跡』(昭和55年度 第3分冊)
- 長野県埋蔵文化財センター 1992 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書1 一佐久市内その1ー下茂内遺跡』
- なすな原遺跡調査会 1996 『なすな原遺跡 No.2地区調査』
- 藤沢市教育委員会 1994 『南鍛冶山遺跡発掘調査報告書 第1巻 縄文時代草創期』
- 前田耕地遺跡調査会 1977~1986 『前田耕地』I~IV
- 大和市教育委員会 1986 『月見野遺跡群上野遺跡第1地点』
- 大和市教育委員会 1989 『相模野第149遺跡』
- 横浜市ふるさと歴史財団 1995 『花見山遺跡』
- 横浜市ふるさと歴史財団 1997 『能見堂遺跡』

*発掘調査報告書の類に関しては、本文中に引用したもの以外は割愛した。ご容赦願いたい。